# 無題

永久ノイチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無題

【Ｎコード】
Ｎ２０８８Ｉ

【作者名】
永久ノイチ

【あらすじ】
人はどこから死なのだろう。
動けなくなったとき？思考できなくなったとき？
人としての定義はなんだろう。
それは形？それ自体のありかた？
限りなく人としての機能をなくしていって、それが人として定義されなくなるなら、逆に限りなく上げていく事で、それを人としての定義から外すことは可能？
ねえ、どうなの？

# 交錯

【交錯】

寒い。凍えるようだ。真夏なのにこの寒さ、あたり前の世界は、僕の世界の常識はいつの日か崩れ去った。
熱が欲しくて肉をかじる。レアのスペアリブは、ほとんど生に近い焼け方だ。
軽くあぶった程度、断面には赤い血が滴っていた。
それをくちゃくちゃとかじり続ける。
弾力のあり過ぎる肉は、生きたままのそれをかじっているかのように錯覚させるほど生々しい。
すぐに肉をたえらげてしまった。
肉を食べ終えてもなにかが足りない。
だって、未だこの凍えるような寒さを払拭出来ていないのだ。
指先は壊死してしまったかのように感覚がない。
自分の存在が端から消えていくような死の感覚。
僕はすでに安定した存在ではなく、いつ消えてなくなってもおかしくない存在へと成り下がっていた。
だれがこうしたのか？　だれのせいでこうなったのか？
もう顔も名前も思い出せない、でも、頭が割れるほどの憎しみだけが残留している。
いつしかそれは、当たり前の生活を、当たり前のように続ける人間へと向けられていた。
安定した存在が憎らしい、だから……したい。
照りつける太陽の下、僕は凍える身体を引きずりながら、次の獲物を探していた。

小雨が降っているせいか、持病の偏頭痛が猛威を振るっていた。
なんて清清しい朝なんだろう、あまりに素晴らしくて吐き気がする。
重い頭を押さえながら続ける登校は爽快なものだった。
すでに霧に近い状態の雨は、空気中に漂って俺の顔に到達している。
もういっそ傘なんか放って、学生の身分も捨てて自由になりたい気分だ。
そうできたらなんて素晴らしいだろう。
しもしないことを想像して楽しむというのは知的生命体の特権だろう。
この世界にも、少しは救いがある気がするからだ。
もちろんそれは想像においてだけで楽しむものであって、それを行動に移すというのはナンセンスだ。
青信号になったので、律儀に左右を確認し、車の存在の有無を確かめ渡る。
この交差点を渡ったらすぐに学校に着く。
そうしたら退屈な授業を義務的に受け、一日を怠惰的に過ごすことになるだろう。
これが人生にとって一番安全且つ効率的な生き方なのだ。
そこにロマンなど求めてはいけない、そんなのはやっと得た日本人の特権を捨てるようなものだろう。
登校途中、浮浪者のような格好をした人物が生徒たちを睨んでいた。
彼は特権を放棄したのだろうか？　それとも、放棄せざるをえなかったのか？　それは彼にしか分からないことだろう。
俺には関係のないことだ。
でも、あそこまで睨まれると罪悪感を感じるぞ、おいっ。
いつしか、その姿が見えなくなると、俺の日常からも忘れ去られ、俺自身もまた退屈な日常に戻った。
今はまだ関係はない……

教室に着くと、律儀にクラスメイトが挨拶をしてきた。
そんな通過儀礼を、俺も挨拶を仕返すという行動によって果たし、晴れてこのクラスの一員として認められた。
社会にでても人間関係は大切だぞ君たち。　まあ、俺はさしてそれらに固執などしてないので上辺だけでやり過ごしているが。
だが、それを生きがいにしてるような人たちは、朝のこの貴重な時間を余すことなくそれらに投資していた。
「カオル」
名前を呼ばれて振り向くと、朝の教室には珍しい顔がいた。
「なんでお前がいんの？」
「いたら悪いのかよ」
むっとした顔で金髪の青年、杉田陽平は俺を睨んだ。
コイツはこの進学校には珍しい、いわゆるアウトローな存在で、珍しく俺と気が合う奴だ。
しかし、学校にいる方が珍しいという有名人がなぜこんな時間にいるんだろう？
それに偏頭痛がひどい今日みたいな日にはあまり会いたくない人物だ。
「ちょっと、気持ちが声に出てますよこらっ」
「律儀にツッコミを入れるそんな普通な人物、　それが杉本陽平だ」
「普通で悪かったなっ」
陽平は笑ったような、怒ったような顔で怒鳴った。
俺は朝の貴重な時間を無駄に使わないため、気を取り直して夢想に戻った。
「おい」
「……」
「おいって」
「……」
「無視すんなっ」
陽平に肩を揺さぶられ目を覚ます。

俺はじっと陽平を睨んだ。
「なんだよ、　なんでいんだよ、　お前がいると風紀が乱れるから不良らしく帰れよすかぽんたん」
「お前、　俺にはなんでそんな厳しいわけ？」
陽平は苦々しく言った。
「お前は特別だよ、　喜べ」
「ありがたやー、　陽平は天にも昇りそうな幸せな顔を浮かべ、俺の足元にひれ伏した。　いっそ本当に天に召されろよ」
「思っても無いし、　しねえよそんなことっ、　さっきからそのひどい解説は流行ですか？」
陽平が怒鳴る。
「で、　なに？」
陽平をいじってこのまま遊んでるのもいいが、なにか言いたそうな感じだったのを思い出し、話を戻す。
陽平は不満げな顔をしていたものの、文句をいっても仕方ないと理解しているのか、諦めたような顔をした。
こいつも俺の扱いには慣れたもんだ。
「いや、　殺人事件あっただろ？」
「殺人事件？」
陽平が言ったことの意味がわからなかったので、聞き返した。
陽平は心底驚いたような、呆れたような顔をして俺を見た。
「おまえんちの屋敷の真隣りであっただろ？　まじでしらねえのか？」
「いや、　知らないぞ、　初耳だ」
陽平は本当に驚いている。
絶句といった様相だ。
「少しはニュースぐらい見ろよ。　ほとんどそのニュースで持ちきりだったぞ朝」
「俺はテレビは見ない主義なんだ。　厳しい家庭で育ったからな」
「はあ、　坊ちゃんは世間知らずで困る」

陽平はオーバーな動作で手を振り、オーノーなんて外人気取りなリアクションをする。
「でもさ、　おまえんちの隣りだし、　事情とか聞かれなかったわけ？」
「あいにく俺は聞いてないよ、　まあ警察が来たとしてもミコトさんが追い払ってるだろうし」
ミコトさんは俺んちのメイドさんだ。でも世間ではメイドさんなんて時代錯誤なもんになっているらしく、とりあえず俺はお手伝いさんということにしている。
まあ、ミコトさんはその名称に不満があるようで、俺がそう紹介すると嫌な顔をする。
「どんだけ力があるんだよ、　おまえんちはさ。　司法が行き届かないなんて、　それだけで犯罪レベルだぜ」
「俺は殺してないよ」
冗談でそう言った。
陽平もそれをわかってか、笑った。
自分でふっといてなんだが、不謹慎かもしれないな。
「ああ、　それはわかってるぜ、　なんせありゃ人間わざじゃないからな」
陽平はにやにやしながらそう言った。
「へえ、　そんな悲惨だったわけ？」
興味なさげに聞き返す。
「悲惨もなにもさ、　この世で一番凶悪なやり口だぜ、　なんせバラバラ殺人だ」
陽平はそんなことを楽しげに言った。
こいつもとりわけ不謹慎だな。
陽平の後ろに立つクラスメイトの一人が眉をひそめるのを見た。
そんなことに気づかない陽平は話を続ける。
「しかもさ、そのバラバラ殺人とだけ報道されてるその事件、ただのバラバラ殺人じゃないんだ、　その死体はまるでひきちぎられて

いたようだ、　っていうんだぜ」
「それまたずいぶんメルヘンな話だな。　あり得ないだろそれ。
下らない怪談話ならやめろよ」
「それが間違いないらしいんだよこれが」
「なんでお前がそんなこと知ってんだよ」
「俺の情報網は広いからな」
要は野次馬仲間ってことか。暇な奴が多いもんだ。
「どうせ歪曲されてるよ。」
「わかってるって、　面白けりゃいいんだよ」
陽平はわかってないなといったふうに手を振った。
こいつは時々外人じみたリアクションをする。
それは俺のカンにひどく触るのだった。
本鈴が鳴り、生徒が席についていく。
陽平も席に戻るようだった。
「どうでも良いけどな陽平。　あんまりそういう風なことを楽しげに語るもんじゃないぜ」
陽平はにやにやと笑っただけだった。

教師が教室に入ってきて、退屈な授業が始まった。
俺は形だけは真面目な生徒を模しているが、実際は上の空といった感じだった。
さっきから時計を何回も見ているのに、一向に時間は進んでくれない。
あまりの暇さ加減に嫌気がさしていたせいか、朝の陽平の話を思い出していた。
バラバラ殺人。
それ自体がすでに狂気じみたそれ。
殺すためだけの行為にしては行き過ぎたそれは、全く労力には全く見合わない。
しかも、普通バラバラ殺人といったら証拠隠滅のために行うもので

はないのか？
陽平の口ぶりでは、それが隠滅された様子はない。
なら、それは効率など関係ない。
憎しみの体現とも言えるものだった。
まあ、殺人自体が理にかなったものではないのだけども。
そこまでするとは、どれほどの憎しみによるものなのか？
平凡な生活をしてきた一般人には想像もつかないだろう。
俺には、つかないのだろうか……

「今日でもう四人目だぜ」
陽平は登校してきて早々、さっそくそんなことを口にした。
陽平はここのところ一週間毎日そんな話題を飽きもせずふってくる。
どうやらもう陽平以外のクラスメイトもこの話題に興味深深といった感じだった。
それも仕方ないかもしれない。
この近辺で起きているその、すでに連続猟奇殺人なんて言われるようになったそれは、その近辺に住む我々にとっては脅威と成りつつあるからだ。
学校もその影響があってか、下校時間がかなり早まっている。
下校の仕方も集団下校を推奨しているようだ。
俺としては不謹慎だがありがたい。
クラスメイトも事件を明日は我が身、なんて戦々恐々してる奴らは少なく、これからなにして遊ぶ？　なんてことに夢中の奴らばかりだ。
この世界一安全な日本で多少能天気になるのは仕方ないだろう。
まさか自分が死ぬとは思っていないようだ。
「で、　今日はどうするよ？」
陽平もその能天気な連中の中の一人だった。
「今日はミコトさんに早く帰ってくるように言われてんだ」
陽平はがっかりしたよな顔をする。

「相変わらず過保護だねー、　ミコトさんは」
「まあ、　それが生きがいみたいな人だからさ」
「じゃあ、　今日は一人で遊ぶのかよー、こりゃあゲーセンかな」
陽平は心底残念そうにそう口にした。
前から思ってたんだが、こいつには俺以外の友達はいないのだろうか？
それで大丈夫なのか？　人のことは言えない俺だが……
「よし、　今日は格ゲーで１０人抜きするぜ」
陽平はすでにこれからの予定を思い満面の笑顔を浮かべていた。
こいつはこいつで楽しそうな人生を歩んでそうなので問題ないか。

連続猟奇殺人が起きていても退屈な授業は我関せず、といった体で相変わらず退屈なままだった。
非現実的な事件の中でも、現実を保ち続ける学校というものは、ある意味、非現実的なものなのかも知れない。
少なくともいま、この学校に現実はない。
つくづく能天気な国だと思った。
まあ、その幸せを手放さないためにも、レールの上を走り続けようではないか。
例えそれが心底退屈なものであっても、文句を言ってはいけない。
退屈な授業に飽き飽きし、窓から空を眺めた。
今日も雨。
相変わらずの偏頭痛に苦しむ俺にとって、その天気は喜べるものじゃない。
まあ、それは一般人にも言えることで、雨を喜ぶなんてカエルぐらいのものだろう。
ふと、校庭に見知った姿を見た気がした。

右腕は既に動かなくなった。

存在しないのだ。
見える、しかし無いという現象。
それは死に近いものだった。
僕はこうして誰にも知られず消えていくんだろう。
それはなんて悲しいものなのか。
それはなんて恐ろしいものなのか。
あまりの理不尽さに頭にくる。
いまは感情だけが唯一実感できるものだった。
その唯一の怒りという感情に身を任せて、もう何人も殺した。
何人だろう？　一人や二人じゃない。
とにかく殺しまくった。
それで分かったことがある。
人間は死ぬ時、本当に生きた顔をする。
なんてリアリティ。
なんて素晴らしい生の実感。
普通に生きていたらこんな素晴らしいものを感じることはなかっただろう。
僕はある意味、彼らを生き返らせたと言えるんじゃないだろうか？
だって彼らは死んだようなものだから。
彼らは死ぬ瞬間、とても僕に似た存在になる。
僕は仲間が増えた気がしてとても嬉しくなる。
ああ、この人はいま僕と同じことを思ってる。
この人は僕の痛みをわかってくれてるんだ。
これはなんて救いなんだろう。
でも彼らは脆い。
だからすぐに死んで楽になってしまう。
それはなんて不公平。
彼らだけは救われて、
僕は死の淵で恐怖する。
だから、僕は二度殺すんだ。

死人を殺す。
彼らだけ救われるなんて許さない。
でも、僕はとても優しいから、また今日も誰かを救　コ　う　ロ
ん　ス　だ。

今日七人目の被害者が発見されました。
警察は、ここ最近多く発生している行方不明者も、この事件に巻き込まれたと見て捜査を続けていく模様です。
続きましては、今日結婚されました、あの超大物カップルの……
テレビを消してソファーに横たわった。
外から聞こえる雨音が、より一層大きく感じられた。
今日も雨。
ミコトさんも洗濯物を干せないで苛立っていた。
俺に対しても目に見えて厳しくなっている。
八つ当たりに違いない。
偏頭痛もここ最近ひどいし、もう踏んだり蹴ったりだ。
だから雨は嫌いなんだ。
それにしても……
「もう十日になるな」
連続猟奇大量殺人事件なんて物騒なものに変貌を遂げたそれは、ここの住人をひどく警戒させるに至っていた。
もう他人事と言えなくなってきたのか、能天気な奴らもここ最近は外出を控えてるようだ。
俺はそんなものは気にしないが、あいにく雨が得意ではないので、折角の休日をこうしてソファーに寝て、滅多に見ないテレビを覗き見てすぐ消すという、無意味且つ怠惰的な過ごし方をしていた。
今日はミコトさんもいないので、家には俺一人しかいない。
例にもよって暇だった。
「陽平んとこに行くか」

だれにでもなくそう呟いて、重い身体を上げた。

今日も日差しが強い。
なのに身体凍えるようだ。
もう足が動かなくなってきた。
今は足を引きずるようにして歩いている。
前から近づいてきていた死の感覚は、もう僕の目の前で鎌首を持たれているようだった。
寒い、怖い。
なんで僕が死ななくてはいけないのだろうか？
僕より死ななくてはいけない奴は大勢いるはずだ。
僕よりも切実に生きたいと思ってる人間はいるのだろうか？
いや、いるはずもない。
能天気に過ごしてる奴らは死を知らない。
当然のように生を扱っているのだ。
なんて憎たらしい奴らだろう？
そんな生になど意味はないというのに、疑問も持たず過ごしているという。
なんて罪。
あいつらは実感などなしに僕を苦しめる。
お前らの存在がどれだけ僕を苦しめているのか。
重いしらさなくてはいけない。
教えてやらなければ、自身の罪を。
救わなければ、罪深き魂を。
最近は僕に恐怖したのか、人は少ない。
少しは生のありがたみを実感しているか？
でも逃げるなんてフェアじゃない。
お前らは救われたくないのか？
もう思考もまとまらなくなってきている。
あと少しで、脳も壊死し始めるだろう。

もっと、救わなくては……
前方に、のん気に歩く奴がいた。
憎しみで歯を軋ませる。
なんて罪深き人間、お前は断罪されるべきだ。
息を潜めて、そっと後を追った。

こんなときに限って陽平はいなかった。
どうせ実家に呼び出されたんだろう。
あいつの欠席率はそろそろやばいそうで、担任に昨日呼び出されてたからな。
あいつも家は厳しいはずなのに、どうしてあんな育ち方をしてしまったのか。
ふと、それは俺にも当てはまるんじゃないか？
なんて思ったりもしたが、とりあえず棚に上げとくことにしといた。
しかし、珍しく雨の日に出たっていうのに……
「役に立たないクズだな」
そんな卑劣なことを口に出していった。
あいつに千と言って聞かせてやりたい。
なんせ俺に迷惑をかけたんだ、その罪、万死に値する。
それをこれだけで済ませてやろうというのだ。
なんて慈悲深き御心。
足の爪の垢を煎じて飲ませたい。
まあ、俺は清潔さだけには気を使っているのでそんなものはないがな。
雨の中を傘を差して歩く。
それにしても、本当に人影がない。
まるで自分以外は消失してしまったかのようで不気味だ。
いくらなんでもここまでいないのは、みんな真に受けすぎだぞ。
いや、俺が能天気なのか？
まあ、俺は全く気にしてなどいないから能天気なのだろう。

しかし、ここまで人がいないとなると……
「カモは俺しかいないな」
そんな自虐的なことを思った。すると、
カツカツカツカツ
後ろから自分の足音とは少しずれた音が聞こえる。
段々と近づいてくる音。
リズミカルに響くその足音にあわせて、俺の心臓の音も高鳴った。

胸の高鳴りを抑え、気づかれないように後を付ける。
「はあはあはあはあ」
自然と息が荒げてきた。
いつもそうだ。
ヤル前にはこうして、今まで忘れてしまった生というものを実感できる。
いまは呼吸というものをしている。
それはなんて素晴らしいことか。
だれかが言った。
生きるというのは呼吸することは呼吸をすることです、と。
そんな当たり前のこと……と思っていた。
今になってそのありがたみを実感できている。
もう息をしなければいけないということすら実感できない僕。
いまはこうして、息を荒げるほど、苦しいほど実感できているのだ。
それに、いま身体が燃えるように熱い。
胸の血液が煮えたぎって沸騰している。
喉から込み上げる血を飲み込むのに必死だ。
もう長い間、こんな感覚を味わったことはないだろう。
久しぶりの生をこれほどかというほどに実感した。
あいつを……たら、僕はどんなに気持ちよくなれるのだろうか？
もしかしたら、僕は普通に戻れるかもしれない。

いつもそうだ。
……す前、いつもそんな予感がする。
結局、時間が経つと元の地獄に戻ってしまうけど。
でも、回数を重ねるごとに、その予感は強いものへと変わっていっている。
今日はこれ以上ないほど。
でも、もう死期は近い。
身体中が悲鳴をあげているのを感じている。
感覚などとうにないのに。
まだ、間に合うだろうか。
間に合わなくてはいけない。
あいつを、あいつを…さなければ……
充分過ぎるほど近づいた。
これで人間では逃げられないはずだ。
興奮する身体を抑え、懐にしまってあったナイフを取り出す。
こんなものは必要ないだろうけど、やはり最初の一撃を自分の手でやるのは気が進まない。
こうやって間接的に殺せば罪悪感が薄れるのか？
僕にまだ罪悪感という感情はあったっけ？
そういえば、なんであいつを…そうと思ったんだろう。
なにか強い感情だった気がする。
喜び？
きっとそうだ。
だって、いまはそれ以外感じない。
ただ、コロしたい。
なにか大事なものを落とした気がした。
でも、未練はもう、ない。
人間では避けられない速度。
飛ぶように、跳躍した。

「君は……、こんな雨のなか、なにしてるんだ？」
雨の中、傘もささず佇む少女がいた。
冷たい目をした少女だった。
真っ黒い髪を雨に濡らし、俺をじっと睨む。
その目には感情がない。
それはマネキンに近い、でもマネキンとは決定的に違う存在。
まず造形が違った。
遙に整った顔立ちをしている。
マネキンにはない、漆黒の瞳。
まつげは筆を走らせたかのように力強く、眉は細く滑らかだ。
肩の辺りで切り揃えられた髪は、それでいて自然だ。
日本人形と西洋人形を合わせたような顔立ち。
なによりマネキンと違うのは、その形には魂があった。
「ずぶ濡れじゃないか」
いって近づく。
なにがそうさせたのか？
きっと、俺はそのあり方に惹かれていたんだと思う。

不可避の、絶対に不可避の一撃だった。
その速さは獣じみていて、それでいて岩をも砕く一撃。
人間の強度など、その一撃の前では意味を成さない。
文字通り、必殺だった……はずだった。
でも、僕のその必殺の一撃は空を切った。
そこにいたはずの奴は、一メートルほど手前で悠然と僕を見ている。
その目に感情はない。
時代錯誤の格好をした、背の高い女。
一切の無駄を為さないその姿は、物凄い違和感を感じさせた。
あれは違う。
あれは違う存在だ。
思考など必要ない感情が、直接頭に叩きつけられる。

逃げろ、と。
「私はあんまり暇じゃないんだけど、出会ってしまった以上、しかたないがわね」
女は冷たく言い放った。
そしてつまらなげに僕を睨む。
そこに一切の感情はない。
僕をまるで虫けらのように扱ってるようだった。
それが、気に食わなかった。
逃げろと、僕の直接的な感情は命令していたが、僕はどうしてもそれを実行することは出来なかった。
なぜだろう？
それは見栄かなにかか？
いや、違う。
僕はあいつは許せない。
それは喜びとは違う感情。
久しく忘れていた感情。
だってあいつは、僕を……
「ヴォォォ」
言葉にならない咆哮をあげる。
言葉なんてすでに忘れた。
もう人になにかを伝える必要はなくなったからか、比較的早くに忘れた気がする。
でも、少し後悔している。
だって、あいつに文句の一つでも言ってやれたら、さぞ爽快だろう。
でも言葉を忘れてしまった僕は、もう行動であらわすしかない。
強く、強く、憎しみの全てを込めて睨んだ。
空間が曲がる。
感覚のある方の腕が痛む。
急速に壊死していく感覚。
それでも続けた。

「へえ、　共感魔術とはね……」
女はそう吐いて後退した。
女のいた場所が崩れる。
僕が……でなくなったときに得た超能力。
あいつでも、きっと殺せる。
「すでにそこまでの領域に達してるとは驚きね。すでにとんだ怪物だわ」
ボクガ…怪…物……
「ヴォォォ」
すさまじい唸り声を上げ突進する。
当たるはずはないとわかっていたけど、直接手を下さなくてはすまなかった。
だって、あいつは、僕を、すでに人間とは見てない。
そんなことは許されるはずなどないのだ。
「良い事を教えてあげましょうか」
女は軽々しく跳躍し、かすり傷一つ負っていない。
僕は突進し続ける。
コンクリートが破損した。
足があらぬ方向に曲がる。
僕の身体はこんなにも脆かったのか。
「あなた、　もう身体中が死んできてるんじゃないの？」
女は未だ喋り続ける。
その口を引き裂かなくては。
「その原因わかってるの？」
爪が割れ、肉が裂ける。
感覚などすでにない僕には関係のないことだ。
大丈夫、食えば治る。
いつもそうだった。
次もきっと。
「だれのせいだと思ってるの？」

当たらない、当たらない、当たらない、早く、早く、早く、コロ
「自分自身のせいだってわかってる？」
え…？　僕の…？　なにいって…
女はただ、笑っている。
「共感魔術なんてリスクの高いものを使ったらそうなるのは当然でしょ。　最初だれを殺したかったかは知らないけどそれで痛みに身を任せて共感魔術で八つ当たりして、　しかもそれで更に呪いを被るなんて本当にバカみたいね。　被害者は良い迷惑だわ」
……なにを
「あなたみたいな怪物は早く始末しなくちゃね。　あなたも悪魔に魂を売ったんだからそれぐらい覚悟してたんでしょ。　まったく、　なんで私が執行人まがいのことしなくちゃならないのかしら」
コロセ、
コロセ、
コロセ
身体が動かない。
「もう無理よ。　目も見えてないんでしょ」
コロサ、
コロセ、
　コロ、
サレ
「じゃあね、　また会いましょ。　次はないけど」
消えていく感覚。
これが死か。
思ったより穏やかだった。
これなら早く死んでも良かったかもしれない。
急速に消えていく意識の中、照りつける太陽が眩しかった。
洋服はもうびしょ濡れだった。
雑務で呼び出されてついてないと思ってはいたけど、やっかいな出

来事に巻き込まれたわ全く。
濡れた髪をかきあげてため息をついた。
ふと空を見上げると、長く続いた雨が止みそうな気がしている。
「これでお洗濯物が片付けられるわ」
早く帰って準備をしよう。
そのときには郁（カオル）に少し八つ当たりをしてやらなくちゃ、でなけりゃ気が治まらない。
雨の中で燃え続ける化け物を横目で睨んだ後、屋敷へ歩き出した。

かすかに少女が笑った気がした。
それに感情はあるのだろうか。
なんだか放っておける気がしない。
いつからこんなおっせかいな人間になったのだろうか？
それにミコトさんになんて言い訳するんだ？
まったくどうかしてるぜ。
「きみ、　びしょ濡れだと風邪ひくし、　よければ俺んちでコーヒーぐらいはご馳走するけど」
少女は僕を感情のない目で睨んだ後、少し頷いた。
やれやれ、ミコトさんの機嫌が良い事を祈るばかりだ。
そうして俺たちは歩き出した。
【交錯　ｅｎｄ】

## 交錯（後書き）

深く影響を受けてる作家が多いので、ある意味二次創作といえるかもしれない。
私自身はこれを私のオリジナルだ、などと主張する気は毛頭ないので、どれかに似ていると思われたら、そう受け取ってもらっても構わない。

# 自動式演奏機（前書き）

# 自動式演奏機

【自動式演奏機】

雪が降っていた。
キラキラと日に反射し、世界を輝かしく染め上げる。
この世のものとは思えない、そんな陳腐な形容で表したくなるほど綺麗な朝だった。
けど、寒いのは堪える。
着込めば熱いし、着ないと寒い、結局少しばかりの寒さを我慢して薄着で登校し、かなり後悔していた。
登校してる途中に少しは温かくなるだろうという予想に反して、天気予報のお姉さんの言うとおり、ここ一番の寒さらしかった。
吐く息は白い。
なんとなしにタバコをふかす真似をして、行動の幼さに恥ずかしくなった。
今日は久しぶりに遅刻してしまったので、もちろん周りには登校している生徒などいない。
そんなことはわかってるんだが、見られていまいか確認してしまうのが悲しい性だろう。
そこで気づいた。
ニット帽を深く被り、立ちすくむ少年がいた。
今まで気づかなかったのが不思議なぐらい堂々と道路の真ん中にしゃがみこんでいる。
「どうしたんだ、　坊主」
綺麗な朝の景色を見て気分でも良かったのか、俺はその少年に声をかけた。
なんてことはない一時の気まぐれだ。
俺はそこまでお人よしではないのだと主張したい。
少年は不思議そうな顔をして俺を見上げた。

頬が寒さで赤く染まっている。
「坊主じゃない、　イチカ」
少女だったらしいその子は不満げな顔でそう言った。
そうやら少年ではなく、少女だったようだ。
でも見た目は男の子のほうがらしいっといった感じだ。
少女は立ち上がり、俺の袖を掴む。
「トーマがいなくなっちゃった」
悲しそうに俺を見上げ、か細い声でそう口にした。

この寒い中、俺は学校をサボタージュして犬なんぞを探している。
それもこれも余計なおせっかいをしたせいだ。
後悔していないといえば閻魔様に舌を引っこ抜かれるだろう。
それぐらい後悔している。
「イチカ、　どこらへんで犬とはぐれたんだ？」
「この街」
情報といったらそれぐらいで、途方もないこの広い街を散策しているのだ仕方がないだろう。
雪は細かくなり、皮膚についた雪が雫になってうっとうしい。
「はあ」
今日何度目かになるため息をついた。
「ねえ」
イチカが袖をひぱってくる。
「なんだボーズ」
「坊主じゃない」
少しからかってやると、イチカはむっとした顔で俺を睨んだ。
とても黒い大きな瞳だ。
ここだけは女の子らしいと言ってもいいかもしれない。
しかし、格好に女の子らしさがないので、いまは美少年といった感じだ。

「イチカ、　どうした？」
納得がいかない顔をしているイチカをなだめる為、俺はそう言い直した。
イチカは何か言いたそうにして、しかし黙って顔を伏せる。
「どうした？」
もう一度聞き直すと、イチカは俺の顔を黒い瞳でじっと睨んだ後、決心したように口を開いた。
「お腹すいた」
「腹減った？」
イチカは顔を赤らめ、うつむいた。
そういえばもう昼頃になるのか、俺も少し空いていた。
「そっか。　じゃあ俺んちで食うか」
そう言うと、イチカは明るくほころばせ、うんっ、と大きくうなずいた。
よっぽど空いていたんだろうか、この年頃は食べ盛りなのかもしれない。
よしっ、と手を繋いで歩き出す。
傍から見れば仲むつまじい兄弟といった風に見えるのだろうか。
ふと、親戚の家に居候している妹のことを思い出した。
キョウとはこんな風に歩いたことはあっただろうか？
俺んちは厳しい家柄だったからなかったかもしれない。
なら今度誘ってみるのも良いかも知れない、考えておこう。
「ねえ、　あれ見てお兄ちゃん」
イチカが無邪気に微笑んでいる。
イチカはご飯を食べれると知ってからか、急に元気になった。
さっきまではほとんど喋らなかったのに現金なものだ。
俺も微笑み返し、イチカの指差すほうを見てみる。
って…
イチカの視線の向こうでは、カップルがなにやら盛り上がっていた。
「仲良いね」

イチカはさわやかな笑顔で俺を見上げる。
そのイチカの目を黙って隠した。
「ちょっとなにお兄ちゃん、　前が見えないー」
暴れるイチカを押さえながら、とびっきり大きな咳払いをした。
カップルは俺たちに気づき、激しく取り乱す。
俺がもう一度咳払いをすると、カップルはすみませんでしたっ、なんて言い捨ててその場から逃げ去った。
まったく、最近の若い奴らは……
「もうっ、　見えないよ」
イチカが俺の腕を強く振り払った。
「へんたいっ」
怒鳴って俺を強く睨む。
逃げるカップルが俺を不審げに振り返った気がした。
「お前な、　紛らわしいこと言うな」
頭を軽くこずく。
イチカは頭を押さえ、憎憎しげに俺を睨む。
「そっちこそ、　いきなり抱きつかないでよね」
「抱きついてなどない」
はっきりそう言って歩き出した。
イチカはまだ不満げだったが、黙ってあとについて来る。
雪はいつの間にか止み、太陽の光で一層輝いた地面がひどく幻想的だった。

「困った。　どうしよう」
屈んで、足元にいる犬の頭を撫でながらそう呟いた。
「なんでついて来ちゃうの？　きみさー」
私の問いかけに、子犬は無邪気に尻尾をふることで答える。
純粋ではない、ぶち模様のまざった柴犬。
とても綺麗な瞳をしていた。
それにしても、困った。

道端で寝転んでいたから、なんとなく頭を撫でてやったらこの始末だ。
この可愛らしい子犬は私を追い掛け回し、雪の中ほっとくには良心が痛むので、私はこうして公園で世話をしているわけだ。
「はあ、　学校さぼっちゃったなー」
「きゃん」
子犬は私の困った顔を見て、可愛らしい声で吼えた。
「きみのせいだってわかってる？」
子犬はただ、無邪気に尻尾をふり続けていた。
ペットフードを与えながら頭を撫でる。
こんな可愛い子を放っとけるわけないよ、まったく。
「これからどうしよう」
途方もなく空を仰ぐ。
雪はいつの間にか止み、空には抜けるような青が広がっていた。
まあ天気は良いんだけど、それにしても寒い。
なんだこの寒さはっ。
このまま外になんて居続けたら風邪をひきかねない。
でも、私の家はペット禁止だし…、
くしゅん、
ちいさいくしゃみをした。
どうやら本当に風邪をひいてしまったのかもしれない。
「きみのせいだよー」
「きゃん」
そんなことなどまったくわかってはいない子犬は綺麗な瞳で私をじっと見ていた。

「なんですか？　それ」
ミコトさんは冷たい目でイチカを睨む。
「このおばさん怖い」
イチカが俺の袖を掴んできた。

「おばさん？」
更に厳しくなるミコトさんの視線。
俺は内心ハラハラしっ放しだった。
なんでミコトさんが……
今日は本家の実家の方で会議があったはずだけど。
「今日は本家の方で雪がひどいので、会議は中止になりました」
俺の気持ちを察してか、ミコトさんはそう言った。
「私がいては困ることでもしようとしてたんですか？　まさかカオルくんが少女趣味だったとは……嘆かわしい」
「そういうんじゃないからっ」
ミコトさんはじっと俺を睨み続ける。
この鬼畜、とこぼした気がするが気のせいだろう。
いや、あってくれ。
「あの、　ミコトさん」
イチカがか細い声で言った。
「なんです？」
ミコトさんは威圧するようにイチカを睨む。
「あの…、あの……」
「はっきりおっしゃってください」
ミコトさんは冷たい声で言った。
子供相手に少し厳しすぎやしないか？
諭そうとしたそのとき、
「なんでそんな格好してるんですかっ、コスプレですかっ？」
イチカがそう声を張り上げた。
瞬間、空気が凍りついた。
今日は一段と冷えるなあ、俺を肩を震わせた。
ミコトさんは黙ったままでいる。
イチカは言うだけ言って、俺の後ろに隠れてしまった。
これが修羅場って奴か。
この殺伐とした空気、プライスレス。

俺は黙って、というより掛ける言葉が見つからず、じっとミコトさんを見ていた。
空気は固まっている。
「ミコトさん、　青筋立ってますよ」
和やかさを一生懸命だそうというようにそう言った。
ミコトさんは意識を取り戻したかのように、じとっと俺を見る。
その目には感情がない、いやこれは……殺気！？
まるで電気ショックを食らったかのように身体が痺れた。
そのまま意識を失う俺。
そうか、これが達人の技か。
気絶するその瞬間まで俺の口は動き続けていた。
ごめんなさいごめんさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…

「えっ、　うそ、　どうして」
交差点の向こう側に瀬戸郁（セトカオル）が歩いていた。
一瞬しか見えなかったけど間違いない。
「学校はどうしたんだろう」
そう疑問を口にしながらも、赤くなる頬を隠せない。
こんな遠くから見ただけで顔が赤くなるなんて……
どうしよう、考えれば考えるほど恥ずかしくなってきた。
いつもそうだ。
私はなるべく瀬戸君を避けて、学校でも生活している。
じゃないと私は、確実におかしくなってしまうからだ。
その努力の甲斐もあって、どうやら私は隠し通せているようだ。
少なくとも、鈍感な瀬戸君には気づかれていないだろう。
なんせ、自分でもまずいと思うほどはっきりと態度に出てしまうことがあるのに、
瀬戸君は私を見向きもしないで平然と通り過ぎる。
私に魅力がなさすぎるのかしらとも思ったりもしたが、どうやらあれが地らしい。

まったく、なんで私はあんな人に惹かれてしまったのだろう。
今まで男なんかに興味などなかったというのに。
知らずため息をついた。
「あれ？」
そういえば、隣りで並んで歩いていたのは誰だろう？
中学生ぐらいに見える少年？　だった。
はて…弟がいるなんて噂は聞いたことはないけれど。
弟がいたら、それはすでに噂になってるはずだ。
それぐらい、瀬戸君のお家は有名だった。
なんせ、この街で一番大きいのではないかというぐらいのお屋敷だ。
初めて見たときは皇居かよっ、と人知れずツッコンでしまったほどだ。
その跡取りというんだから、瀬戸君が有名なのは仕方がないというものだ。
それにとびっきり綺麗なメイドさんがいるらしい。
これは杉田くんが言っていた話だから脚色されていそうだが。
これだけ要素があればもう充分有名になる素質がある。
しかも、これは私の考えだが、メガネを外したら実は物凄い美少年なんじゃないかとにらんでいる。
まあ、それは置いといて……
そういえば、瀬戸君には妹がいると聞いたことがある。
もしかしたら、さっきの少年はその妹さんの友達なのかもしれない。
きっとそうだろう。そうじゃなくてもそれほど気にすることでもない。
それにしても、仲が良さそうだったなー。
私もあんな風に楽しげに話して……
「って、　私バカみたい」
自己嫌悪で自分の頭をこずく。
「きゃん」
「ああ、　ごめん都馬くん」

心配そうに私を見つめる都馬の頭を撫でた。
ベンチから立ち上がり、都馬を抱きかかえた。
そのまま交番に行こうと思う。
幸い、首輪の裏側に名前らしきものが書いてあった。
これでなんとか飼い主さんは見つかるだろう。
あれ…、
「きゃんきゃん」
なんだか弱ってきている。
息が荒くなってきていた。
確実に元気がなくなってきている。
しきりに前足で頭をかきむしっていた。
ご飯はちゃんと食べたはずだし、風邪かな？
それだとしたら大変だ。
まずは交番に行くよりも病院に言った方が良いのかも知れない。
私は急いで病院へ向かった。

「お兄ちゃん、　起きて」
身体を揺さぶられて目を覚ました。
ずいぶん長い間揺さぶられていたようで、まだ身体がグラグラしている。
あれだ、遊園地のジェットコースターに乗りまくったあとの感じに似てる。
遊び疲れて寝床に入ると、身体が浮遊してるかのように錯覚するあれだ。
「起きた？」
心配そうにイチカが俺を覗き見ていた。
なんで俺寝てたんだろ。
原因となる記憶をさぐって、戦慄した。
「イ、　イチカっ」
「な、　なにっ？　お兄ちゃん」

イチカは腕を握られて驚いた顔をしている。
「なにしてるんですか」
背後から後頭部を強く打撃され、頭を押さえる。
危うくまた気絶するところだった。
後ろを見ると、ミコトさんが俺を睨んでいた。
とっさに後ずさりをする。
「痛い痛い」
イチカが俺に押しつぶされ、唸っていた。
「ああ、　ごめんごめん」
イチカに謝ると、イチカは涙目で俺を睨んだ。
あれ？　そういえば、
「なんで俺たち部屋に入れてもらえてるんだ？」
周りを見渡すと、屋敷のリビングにいるようだ。
俺はいままでソファーに寝ていたようだ。
でも、待てよ…
だって、イチカがミコトさんを怒らせて、俺はミコトさんの殺気に当てられて失神……
思い出して、サッと血の気がひいた。
「ミコトさんごめんなさい」
俺は深々と頭を下げた。
「もう散々謝ってもらいましたから結構です」
ゆっくりと上を見ると、ミコトさんが虫けらを見るような冷たい目で俺を見下ろしていた。
その視線にさっきのような殺気は感じられなかった。。
怒られないことに安心して、ソファーに座りなおし、ため息をついた。
なんか壮絶に疲れた。
「謝ってもらったって？」
「ええ、　気絶しながらも謝り続けてました。　それはもう、　恥ずかしいお姿でしたよ」

ミコトさんが軽蔑のこもった視線を向ける。
俺も我ながら情けない。
「お兄ちゃんいきなり気絶するんだもん。　ほんとびっくりしたよ」
イチカは大きく腕を振りながら、そのときの驚きようを必死で説明しているようだ。
ぱたぱたと手を振る様子はなんだか微笑ましい。
自然とにやけてしまう。
「ふう」
イチカは落ち着いたのか、一息ついて胸を撫で下ろした。
「行かなくてよろしいんですか？」
「え？」
俺の返事にミコトさんは眉をつり上げて怪訝な顔をする。
「犬を探していたんでしょう？」
言われて思い出した。
「そうだっ」
イチカの思い出したように大きく声をあげた。
イチカは急いで立ち上がると、廊下の方へかけていく。
ふいっと急に俺のほうに振り返り、こっちこっちと手招きをした。
俺はミコトさんを見る。
ミコトさんは我関せずといった様相で、視線すら合わせない。
小さくお辞儀をして俺もイチカのあとを追った。
イチカは長い長い廊下を一気にかけると、玄関の扉を一気に開け放った。
瞬間、薄暗い廊下に赤い光がパッと差し込む。
この世界から、別の世界への扉のようだ。
そんな詩的なことを思い浮かべて、柄じゃないとそんな虚想を振り払った。
俺を待たず、イチカはその世界飛び込む。
ふいに、また妹のことが頭を過ぎった。

「大丈夫！？」
痙攣を始めた都馬を抱きかかえる。
胃の中が切り裂けるほど走り続けた。
早く都馬を病院に連れて行かなくては。
呼吸はリズムをなくし、肺が暴走して私を傷つけていく。
もう身体は動かない、でも私は決して止まらなかった。
腕の中の都馬は息も絶え絶えとして、目は赤く充血をし始めていた。
通行人を押しのけ、恥ずかしいほど必死で走った。
もう恥じも外見も気にしない。
ただ、ただ都馬を助けたかった。
「きゃっ」
ガタイの大きなおじさんにぶつかって跳ね飛ばされる。
おじさんは私を怒鳴りつけて、頬を殴った。
それからはあまり記憶がない。
都馬は道路に投げ出され、ぐったりとしていた。
私は為すすべもなく、ただただ立ち尽くす。
どうしてしまったんだろうか？
朝はあんな元気だったのに。
涙を堪えて、都馬の側に行きお腹をさすり続ける。
都馬はお腹をさすられる度に、苦しそうにくるくる鳴いた。
その声は堪えようもないほどか弱くて聞いていられない。
私のせいだ。
どうしよう…、
目の前で消えていく命を見守ることしか出来ないのだろうか？
「私が…、私が都馬くんをもっと早く飼い主さんに届けてあげれば」
頬を涙がこぼれた。
「ハッハッハッハ」
一段と激しくなる都馬の息。
まるで最後の命を消費していくようだ。
私に、私に出来ることは…、

「きゃんっ」
都馬は小さく吼えた。
とても小さいけれど、強い咆哮だった。
それきり、都馬は動かなくなった。

ふらふらと街をさ迷う女がいた。
それに理性は感じられない。
たどたどしく歩くその姿は、人形劇のそれを思い起こさせる。
あれは人間だろうか？
少なくとも、いまは人間とは言えない。
あんなものは中身がないただの器だ。
器が勝手気ままに歩き回ってるだけ。
まだ人形劇のそれの方が愛嬌があっていい。
そっとあとをつける。
あの女だったものを警戒してのことじゃない。
周りの人間どもを警戒してのことだ。
ボクはあまり目立ったことをするわけにはいかないが、あれを放っておくわけにはいかない。
いまはまだ無害だが、あの器に想念が入り込むと少しばかりやっかいだからな。
女は都合よく路地裏に消えてくれる。
ボクは歩調を早めることした。
ポケットに手をしのばせる。
冷たい鉄製の感触が手に伝わった。

「トーマが死んじゃった」
イチカはなにかを小さく呟いた。
「んっ？すまん聞こえなかった」
イチカは悲しそうに俺を見つめたあと、大きく首を振って笑った。
その笑顔は、幼いイチカには似つかわしくない悲しい笑顔だった。

そんな顔で見つめられると胸が締め付けられるようだ。
「いいの、お兄ちゃん今日はありがとう」
「急にどうした？」
俺の声は知らずに曇っていた。
なんだか嫌な予感がしたんだ。
こいつ、なんか危なっかしい。
「いや、なんでもないよ。今日はすごく楽しかったよありがとう。
でも、もう私帰らないといけない時間だから」
そういって作ったような笑顔で俺に微笑む。
やめてほしい、そんな笑顔を見てるといたたまれない。
「じゃあね、お兄ちゃん」
「またな」
よくわからない不安を払拭しようと、俺はそう強く言った。
イチカは俺を驚いたような顔で見つめる、そして、泣きそうな顔で微笑んだ。
「うん、またねっ」
そう言ってイチカは大きく手を振った。
大きく、大きく、羽ばたいていくかのように。
炎のような赤い夕焼けにイチカの影がとても長く伸びていた。

四角い四畳半ぐらいの部屋。
目に染みるほどの白い壁に囲われている。
そこにはなにもない、本当になにもないのだ。
そこには…、私の身体すらないのだ。
想像して欲しい。
目を開けても、自分の身体を確認出来ない違和感。
視覚はあるのにも関らずだ。
どう思うだろうか？
私は気が狂いそうだ。

だって、自分を確認できないのだ。
そこにリアリティはあるのか？
紛れもない現実であることは私の視覚で十二分に説明できる。
まわりも浮世離れしてる以外はなんの違和感もない。
ただ、自分が見えないだけ。
それはものすごい恐怖だ。
自分を確認出来ないのなら、私はなにをもって自分の存在を証明すればいいのだ？
四方の壁は視覚できる。
まるで、世界は私だけを忘れてしまったかのようだ。
寒気がする。
体温を感じるのが唯一の救いだろう。
しかし、それも段々と薄れてきている。
徐々に私と言う存在が消えていくようだ。
最後にはきっと、こうして考えることも出来なくなってしまう。
発狂しそうになった。
気を紛らわすために悲鳴を上げる。
そして、あげたことを後悔した。
聞こえない…、
何度も、何度も叫ぶ。
嘘だ嘘だ嘘だ。
何度も何度も叫んだ。
でも、
なんで…。
声が聞こえないの？
私と言う存在が確実に圧縮されていっている。
それは怖いといわずになんと言おうか？
怖くてたまらなくて、ただひたすら私は声なく涙した。

何時間泣いていただろうか？

ふと、久しぶりに音を聞いて目を醒ます。
オルゴール…？
綺麗なメロディの旋律が耳を撫でる。
私は音が聞こえることに感激した。

私の存在は確実に圧縮を早めている。
もう自分の顔も、声も、名前も忘れてしまった。
しかも、気づいた時には視線は固定され、一方しか見られない。
あらゆるものを削っていかれている。
やすりで研がれていく感覚。
でもそのなかで、私を辛うじて繋ぎとめているものがあった。
オルゴールだ。
その音は止むことなく私を癒し続ける。
あれはなんだろう？
記憶というものを失ったいま、あれがなんなのかを思い出すことは出来ない。
それでも、あれは感覚的に、衝動的に私を突き動かす。
ひどく懐かしいような、愛しい様な…。
どんどん自分がなくなっていく、でもあのオルゴールだけはなり続ける。
きっと記憶よりも大事なものだったのだろう。
きっと音よりも、視覚よりも、聴覚よりも。
もう諦めはついているけど、最後にひとつだけ願いが叶うのだとしたら、あれがなんなのか知りたいと思った。
でも、おそらく無理だろう。
だって、こうして思考していても、自分でなにを考えているのか理解できなくなってきているから。

夢を見ていた。
私は制服を着ていて、なぜかとても悲しくて校舎裏でしゃがみ込ん

でいる。
そこに眼鏡をかけた少年が通りかかった。
私は恥ずかしくて、泣いてるのを見られるのが堪らなくて、逃げ出そうとする。
でも、少年は私の腕を掴んで、こう言うんだ。
「泣きたい時に泣かないと、　笑いたい時に笑えなくなっちゃうぞ」
私はなぜかその言葉を聞いた瞬間涙が止まらなくなってしまって、少年の胸で何十分も泣き続けてしまった。
少年はそんな私の頭を黙って撫で続けていた。
初めて人に甘えた記憶。
それからはずいぶん人生が楽になった。
私は、その少年のことがすごく好きだった。
名前は思い出せない。
そうだ、散々泣いたあと私が決まりの悪い顔で困っていたら、少年はお気に入りなんだけど君に似合うと思うと言って、綺麗なオルゴールをくれたんだった。
なんで忘れてしまっていたんだろう？
あれは私の命より大切な宝物なのに…。

イチカを見送ったあと、俺は昔会った女の子のことを思い出していた。
いつか気まぐれで声をかけた少女。
そいつは親友が死んだっていうのに、強がって笑っていた。
俺はそのことがひどく気に食わなくて、少しばかりおせっかいを焼いたんだ。
俺もその頃は堪えることが多く重なっていて、なんだか自分に似たその少女を放っておけなくなったから。
イチカのさっきの笑い方がひどくその少女に似ていたからだろうか？
いまになって思い返すなんてな…。

そういえば、その少女の名前はなんていったっけ？
赤く燃える夕日のなか、懐かしい記憶を手繰り寄せながら帰路についた。

動かなくなった人形を見下ろす。
人形の中身からは赤い液体がこぼれ出ていた。
私の失態だ。
まさかすでに想念が入り込んでいたとは…、
あの姿に知性は感じなかったから勘違いし、気づいたときには手遅れになってしまった。
まさか動物が入り込んでいたとはな。
まあどっちみち、想念が入ってしまった時点で廃人になるのは免れない。
なら死んで幸せだったんじゃないか？
それにボクも助けてやる義務もなかったし、死んだ以上危険はもうない。
なんだ、なんの問題もなかったじゃないか。
血のような赤い空を見上げる、夜も近い。
立ち去ろうとして何かにつまずく。
その拍子に、それは音を紡ぎだした。
流れるような旋律。
それは血のような空と相まって、なかなか絵になっていた。

【自動式演奏機　ｅｎｄ】

## 自動式演奏機（後書き）

何度も言うようだが、私はこの作品を私のオリジナルだなどと傲慢な主張をする気は毛頭ない。よって、これはなにかの二次創作に違いないと思われたら、そう解釈してもらって構わない。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2088i/

無題

2010年12月3日05時19分発行